

幼児のしかけ絵本読みに関する研究

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成14年5月16日受理)

Study on Reading the Pop-up Picture Books of Kindergarten Children

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

佐藤(1995)は、「絵本の挿絵の役割に関する研究—しかけ絵本を通して—」において、「内容理解や心情理解のテスト得点からは、しかけのある挿絵において、理解度は決して高くはないが、感想や反応から、子供がより強く興味、関心をしめしていたことが見てとれる。」と「自分が動かす場合と、人によって動かされる場合とで、子供側の関心の持ち方が異なると思われ、今後の課題となるであろう。」との研究成果を示している。

今回は、いろいろなしかけ絵本を用いて、上記の成果を観察法で実証しようとしたものである。

中澤(2001)によれば、観察法とは、「人間や動物の行動を自然な状況や実験的な状況のもとで観察、記録、分析し、行動の質的・量的特徴や行動の法則性を解明する方法」のことである。「行動記述、行動測定、行動評定、印象評定」の手段により、観察事態として、「自然観察法」、観察形態としては、「参加観察法」の「非交流的観察」を用いた。

本研究において、外国のしかけ絵本4冊としかけのない絵本1冊の計5冊を西野雅子氏と筆者で選んだ。外国の絵本を選んだ理由は以下の通りである。(イ)日本のしかけ絵本よりもしかけが派手で特徴的なものが多く、その種類が豊富であること。(ロ)日本語で書かれた絵本では、しかけそのものではなく、話の内容が子供の興味・関心に影響する恐れがあること。

しかけの種類として、(1)一目見ただけでしかけに気づくもの、(2)よく見ないとしかけに気づかないもの、(3)しかけが単純なもの、(4)しかけが複雑なもの、という4つの特徴のうち2つ以上を満たす絵本として、「絵が飛び出すポップアップ絵本」「ひっぱるとしかけが動く絵本」「画面につけた扉を開け閉めする絵本」「画面がいろいろな形に切り抜かれている絵本」の4種類を選択した。

次に、観察で使用した絵本の説明をする。

絵本 {1} 「絵が飛び出すポップアップ絵本」“SANTA’S WORKSHOP-A MAGICAL THREEDIMENSIONAL TOUR” (Paul Stickland, 1995, Dutton Children’s Books)

「(1) と (3) の特徴を持つ。全4ページからなり、開くとしかけがまるで部屋というひとつの空間のように飛び出す。ひとつのページを独立させてひとつの空間として見る事もできるし、表紙と裏表紙をひとつにつなげて、全体でひとつの空間として見る事もできる。やわらかな暖かみのある色づかいでたくさんの動物、おもちゃ、人物などが描かれ、にぎやかで楽しい雰囲気がする絵である。文章はページの左上に3行程度書かれてある。各ページのしかけは以下の通りである。

1 ページ目：飛び出すしかけ

2, 3 ページ目：飛び出すしかけと開け閉めするしかけ 2箇所

4 ページ目：飛び出すしかけと開け閉めするしかけ 1箇所、切り離して遊ぶことができるサンタクローズ・シロクマ・ペンギンの紙人形

絵から読み取れる絵本の内容は、サンタクローズの家やおもちゃ屋などがあるサンタクローズの国の話である。」

絵本 {2} 「ひっぱるとしかけが動く絵本」”ROBOT” (Jan Pien’kowski, 1982, Delacorte Press)

「(1) と (4) の特徴を持つ。全6ページからなり、主にひっぱるしかけで構成されている。ひとつひとつの絵柄が大きくカラフルで、文章は各ページの下に大きく1行だけ書かれている。各ページのしかけは以下の通りである。

1, 3 ページ目：ひっぱるしかけ 1箇所と飛び出すしかけ

2 ページ目：ひっぱるしかけ 2箇所と矢印の方向に回すしかけ

4 ページ目：ひっぱるしかけ 2箇所とミラー

5 ページ目：ひっぱるしかけ 1箇所と矢印の方向に回すしかけと飛び出すしかけ

6 ページ目：矢印の方向に回すしかけと飛び出すしかけ

絵から読み取れる絵本の内容は、ロボットの国の話である。」

絵本 {3} 「画面につけた扉を開け閉めする絵本」”Anthony Ant’s TREASURE HUNT” (Lorna and Graham Philpot, 1996, Random House)

「(2) と (3) の特徴を持つ。全7ページからなり、各ページのいたるところにめくるしかけがある。落ち着いた色づかいで、ページの左側に10行程度の文章と人物の上に台詞が書かれてある。各ページのしかけは以下の通りである。

1 ページ目：見開き1ページ分が半ページに折りたたまれていて、表側には主に文章が書かれ、裏側にはアリの巣の迷路が描かれている。

2 ページ目：めくるしかけ 8箇所

3 ページ目：めくるしかけ 5箇所

4, 6 ページ目：めくるしかけ 6箇所

5 ページ目：めくるしかけ 4箇所

7 ページ目：めくるしかけ 2箇所

絵から読み取れる絵本の話の内容は、アリの巣あるいは洞窟という不思議な世界を探検するといった話である。」

絵本 {4} 「画面がいろいろな形に切り抜かれている絵本」”THROUGH THE HEDGEROW”

(Jill Barklem, 1993, Harper Collins PublishersLtd)

「(2)と(3)の特徴を持つ。全10ページからなり、画面が切りぬかれて絵が立体的に見えるしかけがほどこされている。優しく落ち着いた色づかいで、ページの左側に15行程度の文章が書かれてある。各ページのしかけは以下の通りである。

1, 3, 4, 6, 7, 9 ページ目：切り抜かれて立体的に見えるしかけ

2, 5, 8 ページ目：しかけなし

10ページ目：文章のみ

絵から読み取れる絵本の内容は、ネズミの家や町の様子、ネズミ達の生活を書いた話である。」

絵本 {5} 「しかけのない絵本」"Harrey Hare-Postman Extraordinaire-" (Bernadette Watts, 1997, North South Books)

「全15ページからなり、水溶性の色鉛筆で描かれたようなやわらかな色づかいで描かれ、動物や植物が細かく描写されている。各ページの絵や文章は以下の通りである。

1, 15ページ目：絵のみ

2 ページ目：見開きの絵とタイトル

3, 9, 13, 14ページ目：見開きの絵で左ページに文章

4, 7, 8, 10ページ目：左ページに文章, 右ページに絵

5, 6, 12ページ目：見開きの絵で右ページに文章

11ページ目：見開きの絵で両ページの下側に文章

絵から読み取れる絵本の内容は、ウサギの郵便屋さんがリスやモグラなどのいろいろな動物に手紙を届ける話である。」

以上、絵本1-5を操作して、ページをそろえたり、話の内容を統一したりしなかった理由として、あくまでも自然状態の中で子供はどのように行動するのかの観察だからである。

仮説は次の通りである。

- (1) 子供は、加齢と共に単純なしかけ絵本（画面につけた扉を開閉する、絵本 {1}）よりも複雑なしかけ絵本（ひっぱって動かす、絵本 {2}）の方に興味をもつであろう。
- (2) 子供は、加齢と共に小しかけ絵本（絵本 {1, 2}）よりも大しかけ絵本（絵本 {3, 4}）の方に興味をもつであろう。
- (3) 子供が自分で操作して遊ぶ場合（絵本 {2, 3}）の方がそうでない場合（絵本 {4, 5}）よりも興味・関心の持ち方が違うであろう。
- (4) 子供は、加齢と共に感想の言い方が高度になり、観察者との会話よりも友達との会話が增加するであろう。

(方 法)

- 1) 対象者：E 大学教育学部附属幼稚園, 3歳児 (13名), 4歳児 (22名), 5歳児 (18名), 総計53名。
- 2) 観察期間：2001年11月30日（筆者も入れて10人の観察者, 1回目）, 12月5日（10人の観察者で不十分なところを西野雅子氏が観察, 2回目）。
- 3) しかけ絵本の分類：単純×複雑, 小しかけ×大しかけを考え, 9種類の中から上記の理由で

5種類を取り上げる。

4) 手続き：事前に観察者を募り，観察するべき項目の用紙を渡して，観察の仕方について説明しておく。幼稚園の自由時間に絵本5種類をもっていき，それぞれに2名ずつの観察者をつける。それで一致率をはかって，信頼性，妥当性の検討とする。各年齢ごとに行い，約20分位の観察である。指標として，注視時間，しかけ絵本の操作の仕方，子供の会話，感想などから比較検討する。

5) 観察の記録用紙：西野雅子氏作成，筆者検討による。

(イ) 絵本を見ている時の表情 (SD法による) - 明るい-暗い，面白い-つまらない，楽しい-楽しくない，嬉しい-悲しい。

(ロ) 絵本を見ている時の会話 (5段階評定) - 独り言を言う，友達と話す，観察者と話す。絵本の内容について，絵本のしかけについて。

(ハ) しかけとのかかわり方 (5段階評定) - 自分からしかけにさわる，友達がさわるのを見てからさわる，観察者が声かけをしたらさわる，何度もページをめくりかえす動作，読み飛ばしをする。

(結果と考察)

Table 1 に1回目における，Table 2 に2回目における各年齢の絵本を見た人数とその割合を示す。

Table 1 各年齢における絵本を見た人数とその% (1回目)

絵本の種類					
年齢 (人数)	絵本 ①	絵本 ②	絵本 ③	絵本 ④	絵本 ⑤
3歳児(5人)	3人(60%)	2人(40%)	3人(60%)	0人(0%)	0人(0%)
4歳児(12人)	6人(50%)	9人(75%)	1人(8.3%)	2人(16.7%)	0人(0%)
5歳児(8人)	5人(63%)	4人(50%)	4人(50%)	3人(37.6%)	2人(25%)

(注) のべ人数

Table 2 各年齢における絵本を見た人数とその% (2回目)

絵本の種類					
年齢 (人数)	絵本 ①	絵本 ②	絵本 ③	絵本 ④	絵本 ⑤
3歳児(8人)	7人(87.5%)	4人(50%)	4人(50%)	1人(12.5%)	1人(12.5%)
4歳児(10人)	4人(40%)	6人(60%)	2人(20%)	0人(0%)	0人(0%)
5歳児(10人)	4人(40%)	7人(70%)	2人(20%)	0人(0%)	0人(0%)

(注) のべ人数

Table 3 に各年齢における会話の特徴，Table 4 に各年齢におけるしかけ絵本に対する行動特徴を示す。

Table 1, 2, 3, 4 から，ばらつきはあるものの，加齢とともに，単純なしかけ絵本よりは，複雑なしかけ絵本に，また，小しかけ絵本よりも大しかけ絵本の方に興味をもっている。また，しかけを操作することの楽しさも味わっている。さらに，しかけについて，絵本を見ての感想など友達との会話が多くなっている。個人差をぬきにしても，一目見てしかけに気付くよ

幼児のしかけ絵本読みに関する研究

Table 3 各年齢における会話の特徴

3歳児	絵本の内容というよりも絵本を見て目にしたものをそのまま言葉にすることが多い。「これは俺の」と絵本を一人占めにしようとする。絵やしかけを見てそこから受ける印象を素直に言葉にする。観察者を介しての会話が多い。
4歳児	絵本に出てくるものの名前を言うだけでなくそこに自分なりの解釈を加えた会話が見られる。子ども同士でしかけに気付き、どうすればいいか話し合う。観察者が介入しなくても子ども同士で会話が進む。
5歳児	友達同士で会話しながら、時にはふざけあいながら絵本を見る場面が多い。「次は僕の番」と言葉で主張し絵本を取り合ってけんかすることはない。友達にしかけの説明をしたり、「これおもしろいよ」と声をかけたりと友達との会話が多くみられる。

Table 4 各年齢におけるしかけ絵本に対する行動特徴

	3 歳 児	4 歳 児	5 歳 児
絵本① 絵が飛び出すポップアップ絵本	興味津々で驚きの表情。絵本とじっくりふれあっていた。お話作り、かくれんぼ遊びに発展。友達と同じ世界を共有して楽しむ。	しかけを見つけると驚きや喜びの声があがる。しかけの飛び出し部分を家の部屋に見立てて「ここはぼくの部屋」という会話がある。	一目でしかけ絵本とわかる。ページはめくるがひとつのページにそれほど時間をかけることはなく、じっくり見る子どもは少ない。
絵本② ひっぱるとしかけが動く絵本	おもしろくないと言いながらも絵本を気にしてちらちらと見ている。一度、絵本を手に取ると興味を持ってじっくり絵本を見てしかけにさわる。少し難しくとつきにくい。好きな子は驚きの声をあげながらしかけを楽しむ。嫌いな子は一目見ておもしろくないといって自分からしかけにさわろうとしない。	一番人気がある。みんなで声をあげてわいわい騒ぎながら見ている。鏡のしかけをひっぱるとロボットのパンツが見えるところに人気あり。自分が先にしかけにさわろうとして絵本の奪い合いもあるが、交代もうまくできていた。みんなが絵本から離れたあとでじっくりと満足いくまで絵本にさわる子どももいた。内容を読むというよりもしかけを楽しむ。	表情も豊かで驚きの声も多い。しかけをひっぱるとロボットのパンツが見えるところに人気あり。矢印の方向にまわすと地球がまわったり、模様が変わったりと変化するものや目の錯覚を利用したしかけに興味を持つ。観察者が話しかけないとすぐにあきてしまう子どももいる。
絵本③ 画面につけた扉を開け閉めする絵本	扉を開けると怖い感じのする絵が出てきたので、鍵を閉めようと言って、開けるしかけを一度めくってはその後すぐに鍵を閉める動作をした。自分の世界の中でじっくり楽しみ、おもしろいことや知ってもらいたいことがあると、観察者を呼んで話しかける。友達との会話よりも独り言が多く、絵本を見るのも一人か二人くらいで大人数では見ない。	みんなでわいわい見るのではなく、一人で見る子どもばかりである。じっくりと見る子どもとばらばらとめくるだけの子どもだけである。	いろいろとしかけをめくり、そこからあらわれる絵に興味を示す。一目でしかけに気付かない子どもは「これしかけ絵本じゃない」「おもしろくない」と言って、すぐに見るのをやめてしまう。
絵本④ 画面がいろいろな形に切り抜かれている絵本	近づいてきてばらっと絵本をめくると、すぐに①の絵本のところに行ってしまう。ほとんど集まらず人気がない。	絵本を手に取った子どもは少ない。見ている間もほとんど言葉はなく、表情の変化も見られない。とりあえずめくってみるといった感じ。	しかけに対して驚きをみせる。友達にしゃべりかけるように読み進める。興味の持続性は弱い。しかけ接触行為はほとんどなし。
絵本⑤ しかけのない絵本	ばらばらとめくっただけ。	誰も興味を示さない。	表情の変化はあまり見られない。描かれているものの名前を言いながら一通り読み終わると満足したようで読み返しは無し。
全体として	男児よりも女児の方が友達との共有ができています。	絵本を見ている他の子どもを見て、つられて見はじめる。しかけ絵本を見たあと、教室においてある絵本を見はじめる子どもがいた。	長時間一冊の絵本を見続ける子どもは少ない。ひとしきりで満足。友達との会話が多い。教室の絵本コーナーに行き他の絵本を読みはじめる場面あり。

うな大しかけ絵本が好まれている。

3歳児はしかけ絵本から遊びに発展，4歳児はしかけを十分楽しみ，5歳児はひとしきり絵本を見てしかけにさわると大満足ということから，3歳児は，しかけ絵本をまだみなれない絵本，4，5歳児はそれほど珍しい絵本ではない。

以上から，仮説（1）（2）（3）（4）は支持された。

（引用文献）

中澤 潤 他編著 2001 観察法 北大路書房 4-5

佐藤公代 1995 絵本の挿絵の役割に関する研究—しかけ絵本を通して— 読書科学 第39巻第2号 58-64
絵本については，本文中掲載のため，さらに，佐藤論文（1995）の引用文献も省略とする。

（注）

西野雅子氏はじめ観察者の皆様，対象児の園児達，愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方には大変お世話になりました。心より感謝致します。今回の発表は主に，12月5日の西野雅子氏の観察記録をもとにまとめたものである。